

## 国立沖縄自然史博物館設立計画と多様性植物学の未来

オーガナイザー

村上 哲明<sup>1,3</sup>, 西田 治文<sup>2,3</sup>

<sup>1</sup> 東京都立大学 牧野標本館, 一般社団法人国立沖縄自然史博物館設立準備委員会  
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

<sup>2</sup> 中央大学 理工学部, 一般社団法人国立沖縄自然史博物館設立準備委員会  
〒112-8551 東京都文京区春日 1-13-27

<sup>3</sup> (一社) 国立沖縄自然史博物館設立準備委員会  
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-2-2 本郷 MT ビル 4階

### **The National Museum of Natural History, Okinawa and future of Japanese botany concerning plant diversity**

Noriaki Murakami<sup>1,3</sup>, Harufumi Nishida<sup>2,3</sup>

<sup>1</sup>Makino Herbarium, Tokyo Metropolitan University,  
1-1 Minami-Osawa, Hachioji, Tokyo, 192-0397, Japan

<sup>2</sup>Faculty of Science and Engineering, Chuo University,  
1-13-27 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8551, Japan

<sup>3</sup>The Preparatory Committee for the Establishment of National Museum Natural History,  
Okinawa, MT Building 4F, 7-2-2, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0033, Japan  
Keywords: biodiversity, botany, plants, The National Museum of Natural History, Okinawa

DOI: 10.24480/bsj-review.12c1.00209

欧米先進国には、長い歴史をもつ本格的な国立自然史博物館があるのが一般的である。これらの国において、自然史博物館は、多岐にわたる研究を通じて自然の継続的、統合的理解を蓄積し、継承しているのみならず、将来を担う子供たちに対しては科学全般に対する好奇心の発露ともなっている。さらに、自然とヒトとの調和的かつ持続的未来を建設するにあたって、自然史博物館が蓄積する膨大な自然監視の資料と情報は、なおさらに重みを増している。アジア諸国もそのような自然史研究と教育の重要性に気づきはじめ、その充実に注力しつつある。特に中国は、巨大情報の集積という戦略的視野が見え隠れするとはいえ、施設拡大と研究者の育成に邁進している。一方、日本は先進国の中で最も生物多様性が高い国であるにもかかわらず、独立した国立自然史博物館がない。

そこで、日本学術会議は2016年に「国立自然史博物館設立の必要性」と題した提言を発表した。この提言と、後述の日本学術会議大型研究及び施設マスタープラン提出については、日本植物学会とその会員も日本学術会議の植物科学分科会、自然史・古生物学分科会

など複数の分科会や、自然史学会連合、生物科学学会連合などを通じて積極的に協力をしている。一方で、日本学術会議は提言を出すことはできても、実際に国立自然史博物館の設立活動を行う機関にはなれない。そこで、この提言の提案者が中心になって「国立沖縄自然史博物館設立準備委員会」を立ち上げ、国立自然史博物館の設立に向けた活動を続けている。この設立準備委員会は、2017年に一般社団法人化された。さらに、この設立準備委員会法人からの提案「国立沖縄自然史博物館の設立 ～東・東南アジアの自然の解明とビッグデータ自然史科学の実現による人類の持続可能性への貢献～」が、日本学術会議のマスタープラン2020において重点大型研究計画の一つに選定された。また、このような学界の呼びかけに応じて、設立予定地とされた沖縄県も計画に賛同し、県民と経済界の協力を得るべく調査費を計上するなどの動きを具体化させている。日本動物学会や日本進化学会など、自然史と関わりの深い国内の学会でも、この計画を紹介するシンポジウムがすでに開催されている。そこで日本植物学会でも第84回大会（オンライン名古屋大会、2020年9月）開催を機に、国立沖縄自然史博物館の設立趣旨を紹介するシンポジウムを企画した。そこでは、新たな技術と理論を駆使して様々な現生植物群（ここでは藻類も含む）や化石植物を対象とした自然史研究を強力に推進している会員に依頼し、それぞれの研究の現状と今後の展望、ならびに期待すべき国立沖縄自然史博物館像について語っていただいた。さらにシンポジウムの参加者にも意見を求めることで、学会員の声も収集できたことは、企画者にとっても有意義であった。

本総説集は、当該シンポジウムでの講演のうち、これまでの設立に向けた活動の紹介、ならびにシダ植物、化石植物、海藻を研究対象にしている研究者による最近の研究紹介と国立沖縄自然史博物館に対する期待をまとめたものである。本総説集を通して、日本の多様性植物学の現状と未来像を見据えつつ、生物標本を作製して（化石標本を発掘して）長期間保管しておくという初源的な活動の再認識、日本に国立自然史博物館を新設することの必要性と重要性等について、理解を深めていただければ幸いである。そして、その新設に向けた活動に対して多くの方々のご支援を賜ることができれば、さらにうれしい限りである。

最後に、シンポジウムの開催にあたってお世話になった大会実行委員の先生方、関係者、この総説を執筆する機会を私たちに与えてくださった電子出版物編集委員の先生方に深く感謝いたします。